

教会会報 いずみ復刊第 36号特集／2022年教会全体研修会  
編集：愛宕町教会・総務部 発行者：宍戸俊介 発行所：甲府市北口  
3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL  
<http://www.atagomachi-kyoukai.org>

(1)みことば

「キリスト者の誕生」

聖書 使徒言行録 第11章19～26節

愛宕町教会牧師 宍戸俊介

ステファノの事件をきっかけにして起こった迫害のために散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行ったが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかった。しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。…バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた。……このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。（使徒言行録11・19、20、23、26c）

ステファノの殉教をきっかけに、厳しい迫害がエルサレム教会を襲いました。散らされた人々は逃れた先の町や村で福音を宣べ伝えながら旅しました。19節によれば脱出した弟子たちが福音を最初に宣べ伝えようとした相手はユダヤ人でした。ユダヤ人は、神がただ独りという理解を最初から持っています。最初のキリスト者は終末が切迫していると思っていたので早く福音を伝えたいと考え、ユダヤ人伝道に向かったのです。

ところが、アンティオキアに着いた時、様子が変わります。この町で「ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせ」（20節）ることが取り組まれました。当時、帝国第三であった都会の生活に弟子たちが根を下ろすことができたためです。仕事を得て生活する中で、町の人々との交わりが生まれギリシア人伝道が始まりました。

「主がこの人々を助けられたので」信じる者たちが与えられたと21節に言われます。多神教の生活を営むギリシア人にキリストの福音を伝え

ることは骨が折れる仕事でしたが、弟子たちは辛抱強く語り続け、遂に多くのギリシア人が信仰に導かれたのでした。アンティオキア教会の誕生です。

この教会は、エルサレムを脱出した弟子たちによって種蒔かれた第二世代の教会です。従って、信仰自体はエルサレム教会と同質のもので、ただし立地により、見た目の生活はエルサレムとだいぶ違いました。エルサレム教会の人々には、割礼も律法遵守もないアンティオキア型の信仰生活が成り立つことは考え辛いことでした。

そこで、調査のためバルナバが送られます。彼がアンティオキアで見たのは、神様の恵みにより十字架と復活の福音に慰められ、勇気づけられて生活する人々が確かに生まれている現実でした。「バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた」（23節）。

教会員の民族構成も信仰生活スタイルもエルサレム教会と違います。しかし、形は違えども、ここにも十字架と復活の福音を信じ、共に歩まれる主に力を頂いて歩む生活が確かに生まれていることを、バルナバは見て取り喜びました。主から離れないようにと、兄弟姉妹を力づけます。その際、彼はエルサレム風的生活習慣や律法遵守を一切押し付けようとしませんでした。

バルナバがエルサレム教会の生活スタイルを絶対視しなかったことは、彼がサウロをアンティオキア教会に紹介したことからも分かります。サウロは元々厳格なファリサイ人でしたが、復活の主との出会いにより律法の行いを塵芥(ちりあくた)のように思い、ただこの方だけが神様と自分たちを結ぶ方だと信じるように変えられた人物です。このサウロを教会の柱になりうる人物と考え、バルナバは彼をアンティオキア教会に紹介したのでした。

この町で、弟子たちが初めて「キリスト者」と呼ばれるようになりました。町の中で洗礼を受け、礼拝をささげて生きる人々―他の者たちとは違う生活を生きている者たちとして、町の中でこう呼ばれたことを考えると、旗幟が鮮明だった訳で少し痛快に思います。

\*夏期伝道実習で、皆さんは、それぞれの町や村に建てられている教会に遣わされます。教会は終わりの日までずっと続いて建ち続けます。一つの教会が育てている信仰の伝統は受け継がれなくてはなりません。

教師が替わる度に、その教師のやり方に合わせるようでは、教会は大きく育てません。もしもバルナバがアンティオキア教会にエルサレム風の生活を押し付けていたなら、生まれたばかりのアンティオキア教会は大混乱に陥ったことでしょう。

バルナバがここに教会が成り立っていると見抜いた眼力は大したものですが、皆さんにも同じ落ち着きと忍耐を身に付けて頂きたいと願います。御言葉をとりつぐ務めは大変でしょうが、主がきっと助けてくださることを信じて奉仕に当たって頂きたいです。全国の教会に遣わされている伝道者が神様から与えられた務めを粘り強く果たせますようにお祈りしましょう。

＊この説教は、7月19日、東京神学大学「夏期伝壮行祈祷会」において語られた説教です。

## (2)2022年 教会全体研修会

恵みにより召されたる者の集い

《講師》 穴戸俊介 牧師（愛宕町教会）

2022年7月23日（土）午前9時30分～12時 《講演・質疑応答》

7月23日（土）午前中、25名の出席を得て、2022年の「教会全体研修会」が開催されました。直前にコロナ感染者数が1,000人を超える状況となり、計画当初、今年こそ集っての交わりのひとときをと予定していた5グループでの分団の時を持つことは断念せざるを得ませんでした。講演の後、短時間ながらも大変活発な質疑応答もなされ、全体として大変充実した研修会となりました。

講演内容と参加者の感想を掲載し、研修会の報告といたします。

『いずみ』編集部

### 1. 「恵み」によって召される？-日本語の「恵み」と神の恵み

今年の全体研修会の主題を「恵みにより召されたる者の集い」としました。なぜこの主題になったかと言うと、わたしは現在、教区の伝道委員長なのですが、東海教区総会で決められた本年の主題が「恵みにより召されたる群れとしての教会」であり、かつ、中静分区から、分区信徒修養会で、この主題について伝道委員長に話してほしいという依頼が寄せられ、立場上、その講師を引き受けることになったからです。その修

養会は7月31日に行われるのですが、ちょうど愛宕町教会の全体研修会がこの時期に重なり、愛宕町では同じ話でも良いということになりました。そういう訳で本日の講演は、来週静岡でも話そうと思っている内容を一足先に皆さんにお話して、質問や感想などを聞かせて頂きますと、さらにブラッシュアップできるかなと思っています。

中静分区から講演を頼まれたのは今年の3月末だったのですが、その時には、ごく簡単に考えていました。「恵み」というのは、人間ではなくて神様の恵みのことなのだから、恵みにより召されているというのは、わたしたちが教会の群れの一員とされているのが自分の努力によることではなくて、神様のお導きによることだと、その点をはっきり申し上げれば良いだろうというくらいに考えていました。今でも、基本的にはそれで良いと思っています。「恵みにより召されたる集い」というのは、人間業ではなく、神様がわたしたちをそれぞれに招いてくださって教会の肢々としてくださったことです。ですから、わたしたちは、その神様の招きを信じて教会生活を続けて行けば良いのだと思っています。

★

しかし、7月まで準備の時間があって、その間にいろいろと考えることがありました。その中で、ふと気づいたのは、「恵みにより召される」という日本語の持つ違和感です。教会が「恵みにより召されたる者の集い」とあるという言い方は、日本基督教団の信仰告白を唱和している教会であれば始終口に出している言葉なので、いつのまにかこの言葉に慣れてしまっているようなところがあります。ところが、この言葉を礼拝の中で唱和することのない人たちや、教会の外の人たちには、「恵みに召される」という言い方は、なかなかピンと来ない言葉ではないかと思ったのです。

「恵みに召される」とは、一体、何に召されるのでしょうか？ 漠然となら、分かるような気もするのです。ですが、ここに言われている

「恵み」とは、実際には何のことなのでしょう？ ごく普通に考えて、「恵み」という言葉はどういう意味で語られるのだろうかと思って、国語辞典をいくつか調べてみました。すると、思いがけないことに気づかされました。

まず非常に驚いたのですが、三省堂の辞書には「恵み」という項目が存在しませんでした。「恵み」という言葉は日本語として当たり前に通

用する言葉だとわたしは思っていたのですが、そうではないようなのです。このことに非常に衝撃を受けました。

「恵み」という項目のある辞書でも、ずいぶん、わたしの感覚とは違うことが書かれていて面喰いました。世間一般で「恵み」という事柄は、受けることではなくて、与えることと考えられていることに気づいたからです。広辞苑などの辞書にあるように、「恵み」とは、「恵んであげること、情けをかけること」という説明に出会って本当に驚きました。世間で「恵み」というと、「恩恵として与えてやる」という使われ方が普通なのだと気づかされました。

そういえば子どものころ、駅前などに傷痍軍人が置かれていて、前を通る人たちにお金を無心していた姿が思い出されました。「恵み」というのは、そういう、恵まれない人々に愛の手を差し伸べてやることとして、世の中では考えられているのだと気がつきました。

すると、「恵み」に召されるということは、まったく訳が分からなくなるかもしれないなと思ったのです。「恵み」は掛けてあげるもので、「恵み」の方がわたしたちに何かを要求したり、何らかの行動をするように促すなどということは、普通の日本語の語感では、まったく分からないだろうと思いました。どうも、わたしたちがふだん信仰生活の中で使っている「恵み」という言葉遣いには、世間一般で使われている「恵み」とは違う内容が含まれているようです。それで次には、そのことを考えてみようと思います。

## 2. 「恩恵」と「恵まれる」こと-精神的充足と物質的充足

「恵み」という項目のない三省堂の辞書には、「恵む」と「恵まれる」という二つの項目がありました。ふだん、わたしたちが考えている「恵み」は、だれかを恵んでやろうというような偉そうな思いではなくて、恵みを頂いているという、平らな思いの方が強いと思います。それで、「恵まれる」という項目の方が、わたしたちのふだん考える「恵み」に近いのではないかと思いました。そこには、こう記されています。「恵む」の受動形。①必要なものが十分にあって、不平、不満を感じない状態にある。「恵まれない(=幸せとは無縁の)人々/恵まれた(=何ひとつ不満のない)環境」、②幸いにめぐり合わせる(良い状態を与えられる)「機会(健康・天候・資源)に--」

「恵まれる」ということは、「必要なものが十分にること」や「健

康、天候、資源などの物質や機会の点で良い状態を与えられること」と言われています。

神様が「恵み」を与えて下さるという場合には、このように健康や様々な機会を与えて下さるという意味で、「恵み」と言われる場合もあるように感じます。たとえば、食卓が支えられ、食べるものが与えられて感謝であるというような時に、「恵み」と言われたりしないでしょうか。「この食卓の恵みに感謝します」というお祈りを、わたしたちは、実際に捧げているかも知れません。食前に歌われる讃美歌でも、こういう「恵み」を感謝しますというような歌詞を含む讃美歌があります。

\*幼児さんびか79「めぐみのかみさま」恵みのかみさま 今いただく食べ物 主イエスの名によって かんしゃします。

\*さんびか「日々の糧を」日々の糧を 与えたもう 恵みのみ神は ほむべきかな。

これら二つの讃美歌で歌われている内容は、まさしく必要な食べ物が目の前に与えられていることの感謝です。そして、それは教会生活やキリスト者個人の信仰生活の中にあるだけではありません。

聖書の中にも、こういう意味で「恵み」という言葉が語られている箇所があります。次には、聖書の中で「恵み」という言葉がどのように出てくるかを確認してみたいと思います。

### 3. 聖書の中に言われる「恵み」

\*物質的意味あい

\*神の救いの御業

聖書の中でも、物質的なものが十分に与えられることを「恵み」とあると言い表す箇所があります。たとえば使徒言行録14章17節で、使徒パウロが食料などが十分に与えられることを指して、「恵み」とあると言っています。

#### ▼使徒言行録14章17節

17しかし、神は御自分のことを証ししないでおられたわけではありません。恵みをくださり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、あなたがたの心を喜びで満たしてくださっているのです。

この記事は、パウロがリストラの町に伝道した際のことを述べている箇所です。この町でパウロは生まれつき足が不自由だった男の人を癒し

て歩けるようにしてあげました。すると、町の人々がその様子を見ていて、パウロとバルナバをギリシア神話の神々と勘違いして二人に献げ物をささげようとするというハプニングが起こります。パウロは町の人たちがパウロたちを拝もうとするのを止めさせた中で、まことの神様について一言述べました。その中に、右の言葉が出てきます。語っているパウロは使徒ですが、聞いている町の人々はキリスト者ではありません。ですから、パウロはここで、世間一般に語られている意味合いで「恵み」という言葉を使いました。ここでの「恵み」は天からの雨や、それによって収穫される食べ物を表しています。ここに言われているように、恵みという言葉には、神様の慈しみを頂いて必要なもの（食物）が十分にあるという意味合いが確かにあります。

わたしたちは、特に食事をする時や献げ物をする際には、食べる物が十分にあり、神様に献げ物をささげることができる豊かさを感謝する生活を実際に過ごしていて、その際に、神様の「恵み」に感謝しています。そのため、「恵み」と聞かされると、物質的なものや、様々の望ましい事柄が十分に与えられることだという思いをどこかで持ってしまうのです。

しかし、聖書の中の「恵み」はいつでもそういうことだけを表わすものではありません。聖書の中で、「恵み」という言葉が、ある特殊な事柄を指して使われている例を見ておこうと思います。アンティオキアの教会が誕生した時、エルサレム教会から遣わされたバルナバは、かの地の教会に「神の恵みが与えられた有様」を見て喜んだと言われています（使徒言行録11・23）。

アンティオキアの町でバルナバが見た「恵み」は、物質的な豊かさとは違うものだったでしょう。もっと別の内容が、この「恵み」という言葉のうちに言い表されています。

バルナバが見た「恵み」は、あれやこれやの良いことや物質的な充足という意味ではなくて、アンティオキアに住むギリシャ語を話す人々にもキリストの福音が伝えられ、その福音を信じるようにされている様子のことです。復活の主イエス・キリストに慰められ、主から力と勇気を与えられて生きる人々の生活が、この町のギリシャ人たちの間に生まれたことを指して「恵み」と言われています。その際、なぜ「恵み」という言葉が使われているのかと言えば、この町の人々がそのようにキリス

ト者として召されたのが、彼ら自身の能力や才能や努力によったのではなく、主イエス・キリストが弟子たちを支えて粘り強くギリシャ語を話す人々に向かって福音を語らせてくださったからなのです。

#### ▼使徒言行録11章20～23節

20しかし、彼ら（弟子たち）の中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。21主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった。22このうわさがエルサレムにある教会にも聞こえてきたので、教会はバルナバをアンティオキアに行くように派遣した。23バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた。

バルナバだけではありません。使徒パウロもまたバルナバと共に、ピシディア州のアンティオキアの町の人々に向かって、この同じ「恵み」について語ります。

#### ▼使徒言行録14章43節

43集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神をあがめる改宗者とがついて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みの下に生き続けるように勧めた。

ここに言われている「恵み」は、神様が食事を与えて下さるということではありません。そうではなくて、パウロとバルナバが語って聞かせた、主イエスの十字架と復活の知らせを信じて生活することが「神の恵み」と言われています。そして、この「恵み」が日本基督教団の信仰告白の中で述べられている「恵み」なのです。「恵みによる召し」というのは、わたしたちにキリストの十字架と復活の出来事が知らされていて、それを信じることで、ある新しい生活へと導き入れられて行くという事態のことを言っています。

その新しい生活に入って行くことは、わたしたちの情熱や努力だけでは不可能なのです。人間の情熱や努力である境地に達することができるのであれば、それは、わたしたちの信心の「報い」ということになるでしょう。しかし、キリスト教信仰の中身は、主イエス・キリストがわたしたちのために十字架におかかりになって死なれ、三日目によみがえられたという福音の知らせです。キリストが十字架にかかってくださった

のも、よみがえらされたのも、そのためにわしたち人間の側が何か手助けしたかということ、そんなことはありません。すべて神様の側で計画され、準備され、主イエス・キリストを通して神様の側が地上に行ってくださいました御業です。わたしたちは、このことを信じ、感謝して受けるほかないような神様の御業です。ですから、それが「恵み」だと言われるのです。

#### 4. 「恵み」の言葉とキリストの御業

\*キリストの御業を証しする言葉

\*キリストの御業の土台の上に教会が築かれる

「恵みにより召される」という際の「恵み」は、物質的なものが十分に与えられたり、機会や精神の上であれやこれやの良いことに恵まれるということではなくて、キリストの十字架と復活の出来事を知らされ、それを信じるということでした。

したがって、キリストの救いを伝える福音の言葉は「恵みの言葉」であると言われます。この言葉にはキリストのなされた救いの御業を証しし、それを聞いて信じる人に働いて、その人を新しい命、新しい生活に生きる人へと変えて行く力があります。使徒パウロは、エフェソ教会の人々と地上での別れをした時、この「恵みの言葉」に彼らを委ねました。

#### ▼使徒言行録20章29～32節

29わたしが去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところに入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています。 30また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。 31だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。 32そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉はあなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。

「恵みの言葉」は信じる者たちを「造り上げ」て行きます。この「造り上げる」というのは、一瞬のうちに全てが簡単に完成するというものではありません。ヨーロッパの教会堂は百年以上もかかって、まだ完成していない建物が多くありますけれども、造り上げられるのには時間が

かかるのです。

「恵みの言葉」は繰り返し何度もわたしたちに語りかけられ、次第にわたしたちを造り上げて行きます。そのために、わたしたちは毎週礼拝に招かれ、主のみ言葉に触れなくてはなりません。日本基督教団信仰告白には、「教会は、キリストの体にして、恵みにより召されたる者の集ひなり」と言われています。教会は、そこに集う人間一人ひとりが中心なのではなくて、わたしたちを招き、造り上げて行く「恵みの言葉」の方が中心なのです。わたしたちは、今現在、出来上がったキリスト者になっている訳ではなくて、「恵みの言葉」を聞いて造り上げられている最中だからです。このことについて、信仰告白の解説をする人々は、次のように語っています。

＊北森嘉蔵「日本基督教団信仰告白解説」

…教会は、「恵みにより召されたる者の集い」であります。このことによって私たちは、教会に連なることが決して人間の恣意的な決意などによるのではないことを示されるのであります。

＊近藤勝彦「日本基督教団信仰告白」を学ぶ

「召されたる者のつどひ」という表現…は、ただ人間同士の集いだということを行っているのではないのです。その集いの成立根拠は、ただ集ってくる人間にあるのではなく、その人が「召された者」だということにあります。ですから、「召し出してくださった方」が、この集いを造られたと言ってよいのです。

＊日本基督教団宣教研究所「信仰の手引き」

問71 教会が「恵みによって召されたる者の集まり」であるというのは、どういうことですか。

答え 教会は人間の集まり、すなわち、「会衆」として理解されています。しかも、その一人一人は「恵みの選び」によって召された者でありますから、決して人間または信仰者が自分の意志で集まって教会を形づくっている訳ではありません。むしろ、キリストの体なる教会がまず先にあり、教会の主であられるキリストが「恵みによって召された者」たちをその中に招き入れることによって、教会の肢とする、と告白されています。

目に見える現象としては、わたしたちがそれぞれの意志で、つまり、自由な決意に基づいて教会に集っているように思えるかも知れません。

でも、わたしたちが教会に向かうことができるのは、そこに教会が建てられているからです。その教会は、主イエス・キリストがご自身の十字架と復活によって、この地上に建ててくださったものです。ですから、それは「恵み」（キリストの十字架と復活）によって「召し出された」群れであると言われるのです。

## 5. 「キリストの体」に属すること

### \*頭なるキリスト／頭に従う体の関係

教会はキリストの御業の土台の上に建てられている群れであり集いですが、「キリストの体」です。信仰告白の中にも、「教会は、キリストの体にして、恵みにより召されたる者の集ひなり」と言われています。

でも、教会が「キリストの体である」とはどういうことでしょうか。これは、だれかが勝手にそう言っているのではありません。聖書の中にそのように教えられているのです。「キリストの体」である教会という言葉は、元々はエフェソ書やコロサイ書の中に語られている言葉から出ています。

### ▼エフェソの信徒への手紙1章22～23節

22神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました。23教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。

### ▼コロサイの信徒への手紙1章17～18節

17御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています。18また、御子はその体である教会の頭です。御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、すべてのことにおいて第一の者となられたのです。

この二つの箇所から聞こえてくることがあります。それは、「教会がキリストの体」というのは、体である教会の側から述べている言い方ですが、これは逆にキリストの側から言うと、「キリストが教会の頭」であるという言い方になるのです。この二つの言い方はコインの裏表のような関係にあります。二つでセットなのです。「教会がキリストの体である」ということは、教会の群れが自分たちの努力だけで体を形作れるというのではないのです。

先に頭である方がおられて、体である教会は、その頭につながることで、はじめてキリストの体とされて行きます。わたしたちの肉体もそうですが、体は頭を失えば生きて行けず命を失います。体である教会は、頭であるキリストを離れては生きることができないのです。

体は頭の言うことを聞いて成長して行きます。人間の肉体を譬えに出すと、まぜっかえす人がいるかも知れません。体が頭を離れて生きられないのなら頭の方も体を離れて生きられないはずだ、と。人間の肉体の場合は確かにそうですが、教会の頭の場合は違います。イエス様は神様と等しい方ですから、たとえ教会が墮落したために見捨てられ、体の役目を失うようなことがあるとしても、頭であるキリストは死にません。そのことは、古いイスラエルと呼ばれる旧約の民のことを考えると分かるのではないのでしょうか。旧約聖書の民であるイスラエルは、元々、神様の民として持ち運ばれてきた人々です。ところが、旧約の民は、真の神様を信じ、感謝して真心から従う代わりに、銘々にとって都合よくご利益をもたらしてくれそうなバアルをはじめとした偶像に心を寄せてしまいました。

エリヤやエリシャ以来、歴代の預言者たちが心を籠め、また口を酸っぱくして造り主であるただお独りの神様だけに立ち返るよう呼び掛けたのですが、ついにイスラエルの人々は偶像への執着を離れられず、王も民も偶像礼拝に呑み込まれてしまいました。その結果、イスラエルは神様に背を向けた責任を問われて、北王国も南王国も滅ぼされ、神様の民としてのイスラエルは解体してしまったのです。

したがって、もし地上の教会が、頭であるキリストと結びつき忠誠を尽くす代わりに、様々なこの世の心遣いや心配りに思いを寄せてしまい、二心を抱くようになる場合には、教会もまた古いイスラエルと同様、神様から捨てられ滅ぼされてしまうことがあるかも知れません。

教会がキリストの体であるということは、教会が、頭であるキリストの恵みの言葉によって形造られ、成長して行くことを言い表しています。教会は、キリストの言葉を聞いて成長する、生きている体なのです。

6. 「キリストの体」が曖昧となるとき、「恵み」も失われる—頭からの逸脱

\*頭の命令なしで暴走する体の逸脱—聖礼典（聖餐／洗礼）の混乱

＊各教区伝道委員長会議での見聞から

今まで考えてきたことからすると、頭であるキリストと体である教会の関係は、本来、ハッキリしているはずで、体が頭に従って行動するように、教会もキリストのご命令（御言葉）に従って行動するはずで、ところが、現実の地上の教会においては、しばしば、頭であるキリストの故に自分たちが体として存在するのだということが分からなくなって、キリストの体らしくないおかしい動き方をしてしまう場合があるのです。「教会はキリスト教会と呼ばれているように、キリストの名によって建てられているからキリストのものなのだろう」というくらいにしか考えられないことが多くあります。つまり、教会は、名目的にはキリストのものだけでも、しかし、実際の体としての交わりは、そこに集う人間たちが、自分に都合の良い仕方で形づくって行けば良いという程度に受け取られることが少なくありません。教会の交わりは、実際にはそこに集う人間同士のお交わりなのだという訳です。すると、教会らしくない、いかにも人間臭い乱れが生じてしまうこともあります。

★

＊どんな混乱が生じるのか？

ここでは、最近見聞きした事例をいくつか紹介してみたいと思います。

最も分かり易く、また有名なのは、聖礼典、つまり、洗礼式や聖餐式をめぐる混乱です。まずは聖餐式の方の混乱を考えてみます。

この混乱は、いくつもパターンがあるのですが、典型的な逸脱は、洗礼を受けていない人たちにも聖餐に与るように促して、聖餐を受けさせてしまうという事例です。洗礼を受けていなくても聖餐式のパンとぶどう酒に与るように勧め、皆で一つの交わりを形づくっていけるように錯覚してしまうのです。しかし、頭であるキリストの命令抜きで、人間が自分の思いつきで行うことは、時にキリストの命令に違反することになりかねません。

聖礼典というのは、本来は、キリストの体である教会が最もハッキリと見える時なのです。

洗礼と聖餐は、それぞれ別々の儀式ではなくて、元々は一体のもので、洗礼が入り口で、聖餐はその後に続く信仰生活の本体です。書物に例えるなら、表紙に当たるのが洗礼で、その後に続く書物の中身――キリスト者の生活で言うと、キリストの体の肢となって生きて行く信仰生活

の中で繰り返し与るものが聖餐です。

「わたしはキリストを信じます」と告白して、教会の群れがその人の信仰を確認し、地上を生きるキリストの体の一部としてその人を受け入れ、洗礼式が行われます。洗礼を受けて教会の肢になったら、今度は、共に体の一部とされていることを繰り返して確認してゆく営みが聖餐なのです。これらは教会が思いつきで勝手に行っていることではありません。洗礼も聖餐も、教会の頭である主のご命令に従って行われるのです。

(洗礼の命令) ▼マタイによる福音書28章19～20節

19...あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、 20あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。

(聖餐の命令) ▼コリントの信徒への手紙一11章23～25節

23...主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、 24感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。 25また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。

洗礼にも聖餐にも、主イエス・キリストによるハッキリとした言葉があります。洗礼の場合には、「父と子と聖霊の名によって、洗礼を授けよ」「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」という言葉です。

聖餐については、「これはわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」「この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲む度に私の記念としてこの湯に行いなさい」というご命令があります。教会は、「キリストの体」として、頭である主のおっしゃったこの言葉を守って、洗礼式と聖餐式を行うのです。「キリストの体」には洗礼を受けて加わります。その際、ただ水をかけて誰かを清められた気分になれば良いではありません。「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように」--つまり、「互いに愛し合いなさい」「心を込めて主に仕えなさい」という、キリストのご命令を、弟子となって心を込めて守って行くことが求められます。そして、その生活の中に、繰り返し

聖餐を守るということもあるのです。ですから、信仰を言い表さなくても、人間的な仲間意識だけで聖餐に与らせるというのは、頭である主イエスのご命令を無視して、人間が勝手に行っていることになってしまうのです。

★

ところで、もう一つ、最近の山梨分区内で起こっている、別の混乱事例もあります。これは、聖餐ではなくて洗礼をめぐる混乱です。二つの教会で相次いで起こったことなのですが、求道者で洗礼を受けたいという気持ちになり、洗礼準備をしていた方が、洗礼式の日を待たずに天に召されるということが起こりました。その際、その教会では、亡くなった人に洗礼を授けたのです。授けた教会の側の言い分は、「洗礼は、主イエス・キリストの十字架と復活による罪の赦しを信じて信仰を言い表した人が受ける。その際に、教会は、確かにその人が教会の群れと同じ信仰を抱いていることを確認して、牧師が洗礼を授ける。今回の場合には、洗礼式を予定したけれども、その日より前に洗礼志願者が亡くなってしまった。しかし、教会の側は、その兄弟が確かに自分たちと同じ信仰を持っていたと、礼拝生活やその他の生活態度から確認できた。それで、洗礼を授けることにした」というものです。

人情とすれば分からなくもありません。でもそれは、教会の頭である主イエス・キリストのご命令によることなのかと考えると、ハテナ？と思わざるを得ません。主イエスは「死んだ人に洗礼を授けなさい」とはおっしゃっていないからです。

わたしたちプロテスタント教会では、今日、聖礼典は洗礼と聖餐の二つだけですが、カトリック教会では聖礼典のことを「秘跡」と呼んで、7種類の秘跡が認められています（洗礼と聖餐以外に、堅信、結婚、叙階、告悔、終油の五つ）。

秘跡は説教と並んで、神様の恵みがもたらされる手段であり、神様がその出来事とおしてお語りになる時だという理解がされています。プロテスタント教会は、その七つの秘跡を洗礼と聖餐の二つに絞りました。その基準は、聖書の中にそのことを行うように明らかに命じられているかということと、洗礼の水や聖餐のパンとぶどう酒のような物質が介在しているかという二点でした。

その結果、洗礼と聖餐以外の「秘跡」は頭であるキリストから命じられたものではなくて、人間の思いや必要から始まっていることであると

考えられて、聖礼典から外されたのでした。例外的なのは告悔で、ルカによる福音書に主イエスのハッキリした言葉があります。

#### ▼ルカによる福音書17章3～4節

3あなたがたも気をつけなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。 4一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのもとに来るなら、赦してやりなさい。

これだけハッキリした言葉があるのに、告悔が聖礼典に入らなかったのは、告悔に際しては媒介となる物質が存在しないからです。言葉で悔いを言い表し言葉で赦しが宣言されるというのは、愛宕町教会の金曜礼拝の式文の中にもその要素が見られますが、大元は罪の赦しを言葉で宣言する説教に由来することです。それで、告悔は、そこで起こっていることはイエス様のご命令に基づくことだけれども、物質が介在しないので聖礼典ではないとされました。他の四つの秘跡は、イエス様のみ言葉による命令がないので、聖礼典に加えられなかったのです。

ところで、イエス様の洗礼命令はどういう言葉だったのでしょうか。

#### ▼マタイによる福音書28章19～20節

19...あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、 20あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。...

「洗礼を授けよ」、という命令は、「すべての民を弟子にせよ」ということの具体化です。そしてそれは、水をつければ良いというのではなくて、「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えよ」という中身のある命令でした。洗礼は、生きている人に施すものです。その人が主に従う生活を生きるようになる点に主眼があるのです。そうやって、キリスト者は頭であるキリストの下に生活するようになり、生きたキリストの体である教会が形作られて行くことになります。

死者については、主イエスは別のことを命じておられます。

#### ▼ルカによる福音書9章59～60節

59そして別の人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。 60イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」

主イエスは別に、キリスト者に葬儀に参加するとか、父を葬るなど言っておられるのではありません。主イエスの召しよりも先に父親を葬る務めがあると言った弟子に向かって、「あなたの務めは神の国＝神様のご支配に仕えることだ」と言っておられるのです。

主イエスは「明日のことまで思い悩むな...その日の苦労はその日だけで十分である」（マタイ6・34）とおっしゃいます。地上を去った後のことは、主にお委ねするのがふさわしいことなのです。

死んだ人に「洗礼」を施した教会は、その教会とすれば、一緒に教会生活を過ごし、心情的には主を受け容れた人が洗礼式の日を待たずに天に召されたことがショックだったのでしょうか。召された方が、自分たちと同じ教会員だと確認したかったのだらうと思います。人情的には分かります。ですが、聖礼典がキリストのご命令に従って執行されるのであれば、亡くなった人への「洗礼」は聖礼典とは言えないでしょう。

それは、教会の人々が召された人を近しく思って、死後にその人を憶え祝福した記念の業ということになると思います。召された方が、教会の中で憶えられ、記念されることはごく普通に行われていることです。その記念のやり方として、洗礼と紛らわしい所作が行われたということになると思います。

また、記念会としてその方の生きてご生涯を振り返るのだと言っても、実際の教会生活は求道者として過ごした訳ですから、その方の地上の人生の中には洗礼を受けたキリスト者として生きて足跡は見出せないことになるでしょう。死後の洗礼ですからそれは当然です。その場合、その人の信仰を今生きている者たちが受け継ぐと言っても、受け継ぐべき信仰の歩みを憶えるのは困難でしょう。死んだ後に無理やり洗礼を授けて教会員であると強弁するよりも、愛宕町教会の逝去者記念式で憶える方の中に時折おられますが、その方自身は地上の生涯の中で信仰を言い表すまでに至らなかったけれど、家族の信仰に理解を示していたとか、家族の信仰を喜んでいて、その家族の申し出によって覚えることにしたとか言った方が、よほど清々しくその方を憶えることができるのではないかと思います。

いずれにしても死んだ人に洗礼を施すことは、信仰を言い表していない人にも聖餐を勧めて与らせるのと同じような誤解をはらんでいることを指摘したいと思います。

恵みによって召された集いである教会は、キリストの体としてみ言葉に従って生きることが、恵みを味わう具体的な道なのです。

★

また次に、伝道委員長会議での見聞ですけれども、今回、東海教区の伝道委員長に選挙されたために、日本基督教団の各教区伝道委員長会議に出させて頂きました。その会議では三つの教区が発題をし、その発題を聞いて分団に分かれ議論するという形が取られたのですが、ある教区が発題が今回の主題との関係で心に残りました。

その発題では、教区内の青年伝道の取り組みや、教会の立地している土地の課題を教会がどう担っていくかというような話題がひとしきり話されたのち、最後に「伝道を阻害するもの」という話題に触れ、感染症や景気の低迷といったことも確かに困ることなのだけれども、最大の問題は、教会に遣わされている伝道者自身なのだということが話され、三つほどの実例が出されました。

最初の教会では、牧師が信徒の時代から異端グループと交流があり、牧師になってからは自分の教会にその異端グループの講師を招いて、教会が混迷しているという実例が話されました。二番目の教会では、牧師が夫婦で高圧的な言動が目立ち、また、果たすべき職務を果たさず、そのことを尋ねられると、口先ではいかにも働いているような口ぶりで答え、教会の地域的な信用が損なわれているという実例が語られました。最後の教会では、併設施設の職員に対して法的にも抵触するような扱いをして訴えられ、社会問題化しているという実例が報告されました。

そういった数々の実例を、その教区の伝道委員長は牧師個人の資質に問題があるという立場で紹介しておられたのですが、しかし、牧師が問題を抱えた罪人であるというのは、実は、どこの教区のもの牧師を取ってみても同じであると思います。

問題は、教会が同じ頭に仕える一つの体同士であるという理解が欠けてしまっているため、教区内の他所の教会のトラブルを対岸の火事のようにしか感じられない点にあるように思いました。このこととの関連で思い出したことがあります。

わたしは伝道委員長の職務として、新しく東海教区においでになった教職をお訪ねするようなプログラムを実施しています。その訪問を喜んで迎えてくださる教会が比較的多いのですが、時々、そんな活動は時間・お金・労力の無駄で、一回ぐらいの訪問では交わりは生まれえないの

だという、厳しいご指摘を頂くこともあるのです。

確かに、一度の訪問で簡単に信頼関係が生まれるとは思えないという指摘にも一理はあると思います。わたしは能天気なので、温かく迎えていただければ、それだけで良い関係が生まれ始めていると思いがちなのですが、そんな活動は上辺だけの形に過ぎないではないかと言われてしまえば、それは否定しづらい面があります。要は、その時の出会いを、その後、どのように育てて行くかという姿勢がお互いに問われるのですが、その時にとても大事になってくるのが、お互いが同じ主を頭としている肢体同士なのだという理解だろうと思います。

教区の関わりを体同士の関わりではなく、自分の教会の外側からの干渉であると考えられる場合には、その反面で、自分の教会の交わりについては内輪のことであると思う考え方も育ち易いだろうと思います。一個教会の中では、牧師がみ言葉を取り次ぐ務めを果たしていますから、牧師を頂点とするピラミッド構造が生まれる場合があります。ところが、そこに落とし穴があり、牧師が暴走してしまうと、その牧師個人の資質の問題とされ、批判が個人に向かうようになるのです。

しかし、本当の問題は、教会の頭である主に従う体としての教会形成、教区形成がうまくいっていない点にあると思うのです。わたしたちが、お互いに主の体であり、同じ体の肢体同士としての交わりができる時、そういう関係は、人間の才能や努力によるのではなく、文字通り神様の恵みによることだろうと思います。

その意味では、一個教会だけで「恵みにより召された集い」であることは、困難なことであるのかも知れません。分区や教区の交わりの中で、平らに仕え合う交わりを互いに形づくって行くことが求められているのではないかと思います。

## 7. 「恵みにより召されたる者たちの集い」

\*土台の上に体が築かれる

\*体の贖われることを願い求めつつ「終わり」の完成を願い歩む群れ  
(教会)

ようやく終わりに辿り着きました。今まで申し上げたことは、やや雑駁でしたので、最後にもう一度、今日の話を取り返しながら、要点をまとめることにします。

まず、「恵みにより召される」ということについて、日本語として読

むと、いぶかしく感じる可能性があるということをお話しました。日本人は、恵みをただで受けるということを良しとしないで、何かの努力の報いを得たいと願うところがあるためです。

しかし、神様との間柄が切れている罪の問題をどのように清算し、決着をつけるかという点では、人間は何もすることができません。神様の側から、主イエス・キリストを通して、殊に、主の十字架と復活の御業によって、わたしたちの罪が清算され、そのことについてはイエス様の苦しみと死によって償いがつけられて、新しい生活の中にわたしたちが招かれるのです。

その新しい生活は、キリストの御業を土台とし、キリストを頭として、そのみ言葉に従って生きる生活です。ところが、人間が集まると、頭であるキリストの言葉に従うよりも、自分たちの都合や自分たちの関係の方を先立たせようとする逸脱が生まれるのです。

皆が頭に従って生きるのではないと、心を合わせて神様を賛美し、恵みを受けて生活することが難しくなります。そういう事例は、残念ながら教会生活の中で枚挙するに暇がないほどなのですが、そうした人間臭い混乱を鎮め、教会らしい営みを造り上げるのは、神様の恵みの言葉です。パウロはそのことを信じて、エフェソ教会の人々を、神様ご自身のなさりようと恵みのみ言葉に委ねていました。

わたしたちは今、そういう恵みのみ言葉の種がまかれ、キリストの体として育ちつつある中を生きています。恵みのみ言葉に慰められ勇気を与えられながら、終わりの完成の時を楽しみにしながら生きているのです。

その意味では、教会はいつも、形成途上の群れというところがあります。今現在が教会の出来上がった姿なのではなくて、最後の完成の時に向けて、今のこの肉の体が贖われることを願いながら、歩むようなところがあるのです。「恵みにより召される」ということを考える場合には、わたしはこの終わりの完成の日に向かって教会が導かれ、招かれていることを覚える必要があると思います。その最後の目的地に辿り着いた時、そこで行われるのは、神様との水入らずの直接顔と顔とを合わせて喜ぶ礼拝です。

その終わりの礼拝を楽しみにしながら、今、わたしたちは地上で礼拝をささげて生きるのです。地上の礼拝では、キリストの生きたみ言葉が

語られ、それが信仰を持って聞かれ、わたしたちがキリストの体の部分らしく、形づくられて行きます。そのようにして地上の教会も歩んで行くのだと思います。終わりの日の完成を楽しみに目指して、今はこの土地に建てられている教会の礼拝を、感謝し、喜んでささげるようでありたいと願うのです。

### 《出席者の感想》

\*雨宮 健

キリスト教における恵みについて、改めて思う。

主イエスが、この世から教会を選び、キリストの体となる愛の集會をそこに導いたことを、ふと思った。この教会で神様が僕を導き、主の愛の交わりの中に、教会生活を続けられたことを、神様に感謝せざるを得ない。今思うと、7日に一度教会生活を続けられたこと。一つ一つは小さかったけれど、聖書の御言葉に救われたと思います。これからもこの教会で恵み豊かに過ごせることを思います。神様の恵みは素晴らしい。

\*石橋茂美

「恵み」って一体なんだろう？改めて考える機会が与えられ、感謝です。「召される」ことがあって、初めて、それは「恵み」であることがわかるのかなと思いました。主に救われる出来事を、御言を通して学び、「ああ、これは、こういう言葉で表されることだったんだなあ」と振り返ることができました。まるで、体の一部一部を繋ぐ筋のように、言葉によって教会につながり、教会の一部として用いられていくのかなと思います。これからも、続けていくことは大事ですね。

\*荻野淳子

これまで、神様の恵みという言葉は何の気なしに使ってきたように思います。物質的なこと、環境等、自分にとって良いことを神様からの恵みととらえて来ました。

今回研修会を終えて、「私たちのために御子を与えてくださった」という一番の愛と恵みについて、改めて考えることができました。その恵みによって集められた群れである教会と、一般の社会の集まりとの違いについても考えさせられました。

\*河西光代

コロナのために外出困難の時に、研修に参加できたことは、大き

な恵みでした。神さまから恵みを与えられて、その中でいつも感じて感謝していることは、生かされている喜び、苦しみも悲しみも神さまからのプレゼントだと思えるようになりました。

生かされている喜び、また天の御国を待つ喜び、主の恵みに今日も生かされている、研修会に参加できましたことを感謝しながら、87歳の私です。

＊清藤和子

『恵み』を日本の辞書からだけでなく、聖書辞典ではどう使われているのか、知りたかったです（聖書の中での恵みは記されていましたが）。ご講演ありがとうございました。

＊清藤城宏

今回は、「今年こそ集まって話し合いのできる研修会にしたい。最近なかなか教会内で言葉も交わす機会も少なくなっているのでは」と思い、講演の後、5グループの話し合いの場を設ける計画でおりました。しかし山梨でも1000人超えの感染者急増に見舞われ、急遽分団は中止。しかし質疑応答に切り替えたにもかかわらず、活発な質問、感想、意見が寄せられ、会として盛り上がったことは感謝でした。何気なく口から出てくる『恵み』の本質的な意味が明らかにされ、また主イエス・キリストを頭とするつながりの中で形成されていく教会を意識させられました。コロナ禍にいるからこそ、逆説的に『神の恵み』の深みと、キリストにある『教会の交わりのきずな』の憧れを持ちつつ、礼拝に招かれている中で前進していくのだと確信した次第でした。

＊豊田香織

宍戸先生により、私たちが頂いている恵みの中心が、「主イエスが十字架にかかり、よみがえられて私たちと共に歩んで下さることだ」と伺うことができたのは、本当に大きな恵みでした。

また、信仰貧しき僕も「み言葉に触れることで造り上げられてゆくのだ」とお聴きし、神様の大きな愛と慈しみの中で生かされている者として、大いに励まされ、感謝、感謝でした。

＊古屋秀樹

「恵みにより召されたる者の集い」とは、教団信仰告白で教会について述べている最初の言葉であり、私達の信仰にとって「教会」の最も大切な本質を表している言葉と言えましょう。私達は自らの意志で集った

のではなく、神様の一方的な恵みにより召されて集った者たちです。各々罪赦され救われ、不完全でも主イエスが伴ってくださる人生を、感謝しつつ一歩一歩歩む者たちです。しかし、私達はしばしば人間の思いを優先しがちです。教会の中心、頭はあくまで主イエスです。何よりも主のみ言葉、み旨に聞きながら教会に仕えていかなければなりません。今回の研修会でこの大切なことを改めて確認させていただきました。

\*宮崎美千代

大変良い学びとなり感謝いたしております。

コロナ禍の中、参加できた健康を与えられていること、それだけでも感謝です。このように「恵み」という私の概念は与えられるものと思っておりましたので、「恵み」が研修テーマになることがむしろ不思議であり、辞典に掲載されていないという点では驚きでもありました。

また、神様が私たち信者一人一人に生まれた時に与えられた資質をずっと守り育てて下さっていること、私たちはまだ信者としての成長過程にあるということを感じさせて頂き、これも感謝でした。ありがとうございました。

\*宮澤陽美

主題を、単語として一つ一つ丁寧に教えていただき、讃美歌や聖書に記されている「神の恵み」、「召された者がイエス様を頭とした教会の体、教会を成す」、いつもさらっと聞き流してしまっている一節を多面的に学べ、感謝です。

神様によって計画されたこの世界で、十字架と復活を信じ、終わりの日に神様が完成してくださることを待ち望みたい。

\*渡辺春美

コロナ感染者が山梨でも1000人を超え分団は中止となりましたが、研修会に参加できました事を感謝しています。

私達がよく使っている『神の恵み』という言葉、本当によく分かって使っていたのでしょうか。ただ漠然としたとらえ方しかしていなかったように思います。天からの雨、実り、豊かな食物もそうですが、聖書から聞く恵みは主イエスの十字架と復活、そして主が今も共にいて歩んでくださること、私達はその恵みによって生かされていることを感謝したいと思います。そして主イエスの十字架と復活という恵みの御言葉によって、私達は何年もかけて造り上げられていくことを教えられました。終

わりには質問や感想が活発に語られ、良い研修会であったと思います。

\*匿名氏

「恵み」と聞けばすぐに、神から与えられる恵みと受け取っていましたが、それは当たり前ではなく、キリスト者であるからこそ、そう考え、受け取っていることを教えられました。またその「恵み」が物質的なものも含みつつ、その中心はイエス・キリストの十字架と復活、すなわち、罪の赦しの恵みであることを改めて覚えることができました。

「神の恵みの下に生き続けるように」（使徒言行録14・43）、「神とその恵みの言葉は、あなたがたを造り上げることができる」（同20・32）という御言葉から、私たちは“出来上がったクリスチャン、ではないということも学びました。年月をかけて、御言葉によって造り上げられていく、途上にある者であることを忘れていたように思います。

「教会はキリストの体」（エフェソ1・23）、キリストは教会の頭ということから、みんなで頭に従う仕方で体なる教会が造り上げられていることも学び、礼拝によって、御言葉によって、日々新たに造られ変えられる大きな喜びに満たされました。

\*匿名氏

今年も全体研修会が出来、加えられて本当にありがたく、嬉しかったです（コロナ禍に於いて本当に良かったです）。

先生の説明、お話が、順を追って具体的になされ、分かりやすかったです。神様の「ありよう」を、恵みの出来事を思い知る事ができました。

欠けるところなどない何一つないお方が、私たち人間をご自分のものにしてくださるために、イエス様の十字架と復活をくださり、神様の側の一方的な恩寵、御愛の賜物と改めて強く心に刻みました。礼拝に出席し、御言葉を聞き続け、祈り続ける事ができますよう、御霊のお働きにすぎる思いです。ありがとうございました。また続けてくださいますようお願い致します。

### (3)2022年度夏期伝道実習報告

「主の恵み」愛宕町教会での実習の喜びと感謝

東京神学大学学部4年 久保木崇

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイによる福音書28章20節b）

父なる神の御名をほめたたえます。

まず、私の実習先を愛宕町教会でと備えてくださった主に感謝いたします。そして、実習前から祈りに覚えて、様々な準備をくださった宍戸先生をはじめとする愛宕町教会の皆様は心からお礼を申し上げます。コロナ禍の制約がありつつも、愛宕町教会の皆様との一か月は、幸いに満ちた時間で、思えばとても短く、あっという間でした。この期間、足りない未熟者の私を、皆様は温かく支えてくださいました。キリストの十字架による赦しと、復活の命に生かされている確信と喜びに満たされている愛宕町教会の交わりに加えていただいたこの経験は、私がこれから遣わされていく伝道者としての残りの人生において、主にあって大きな支えとなることと思います。

改めて一か月を思い起こすと、恥ずかしくなることばかりです。しかし、宍戸俊介先生はそのような私のために必要な訓練が何かを見極めて、聖書の言葉と向き合い、開かれたテキストに集中するためにすべき実践を、牧師として親身に、丁寧に教えてくださいました。なぜ今日、神がこの御言葉を与えたのか、その特別なメッセージを聴き、他に目を奪われることなく語ることの大切さを、鋭く且つわかりやすい言葉でご指導くださいました。さらに語学を苦手とする私に、聖書に深く聴くため、新約聖書のギリシャ語原典（旧約の場合はヘブル語原典）に立ち戻る基本を具体的な方法も含めてご助言くださいました。これらの学びと準備こそが、説教においても聖書研究においても、「私の話」ではなく「神の言葉である聖書の御言葉をそのまま」に、信徒の皆様が携え帰ることにつながるのだということを繰り返し教えてくださいました。そのために真剣に祈り、奉仕する教師たることを学ばせていただきました。神学校で学んだ（これからも学ぶ）基礎を含め、その意味を振り返りながら、実践としての教会での一か月の訓練を通して、これから生涯にわたって御言葉と格闘し学び続けることの大切さと喜びを知るよう、静かで優しい言葉をもって語ってくださいました。宍戸先生は、御自身も学びの途上にあると謙虚にお話されながら、包帯をひと巻するがごとくにゆっくりと、しかし、一歩ずつ学び続けることの恵みを先輩として教えてくださったのでした。私はその言葉に、牧師としての内に燃え

る情熱を感じさせていただきながら、主に仕える牧師の姿を間近に見させていただきました。また、今回の実習で主に与えられた10の聖書箇所について、私も自覚していない深い関連性を毎回解説してくださり、御言葉を読み解く中に終わりなき真理の探究があることも教えてくださいました。先生の書庫に並ぶ膨大な書物に圧倒されつつ、その学びの一步をまだ踏み出したに過ぎない自分を思い、こんな私の為に道を示し、導きを与えようと、愛宕町教会での実習を備えられた主の恵みの御業に気付かされたのでした。

この期間の皆様との交わりについては特に感謝を申し上げます。CSで子どもたちと語らい、保護者の方にもお交わりをいただきました。教会が次なる世代に信仰を継承するために、熱い祈りと奉仕を続けていく大切な場にご一緒する機会となりました。礼拝の祝福授与では、子どもたちを一番前に招いた上で、神から皆への祝福が宣言される幸いに共に与りました。そして、何より特別な経験となったのは8回の聖書研究でした。参加された皆様の聖書に忠実に聴く姿勢に感激し、多くを教えられました。また、次に迫る聖書研究の準備の度に新しく気づきを与えられる聖霊の導きと恵みを経験しました。しかし、熱心な質問に答えられない場面もあったことは深い反省となっています。神が別な時にお語りになることもあるかも知れませんが、私の準備と学びの不足のためにお答えできない時があったことは申し訳ないことでした。神の憐れみによって皆様に必要な御言葉の導きを与えられますよう祈ります。諸集会では、私自身も一緒に御言葉に養われました。コロナ禍でも守り続けられてきた礼拝、夕拝、祈祷会の諸集会で、私もたくさんの御言葉の恵みを受けました。この聖書の全てを通して、神のご支配の内に、教会が主の御言葉によって形作られていくことを強く感じ、見て学ぶこととなりました。

私の一か月の生活にも、皆さんが心を砕いてくださったことに感謝いたします。教育館を修繕してご準備いただき、エアコン全開にて過ごす一か月でした。寝具一式もすべて整えられ、何不自由なく過ごせました。また、私の健康と食生活のためにも心砕いてくださった方々に本当に助けられ、支えられました。私はこの一か月でウエストがぐっと豊かにされました。また、特別に交わりの時を割いていただいた方々にも、心からお礼を申し上げます。ご家族で細やかなご配慮をくださった穴戸

先生ご一家にも、心から感謝を申し上げます。

実習最後には、皆様の祈りと励ましの内に送り出していただきました。感謝の思いと共に熱いものがこみ上げました。御言葉に学ぶことが中心で、他のご奉仕で一緒にいる機会が少なかったこと、お詫びいたします。皆様の尊いお働きに感謝するばかりで、何もお返しできないままでしたが、いつの日か、主にあって皆様に再びお目にかかる時が来ることを切に願いつつ、与えられる地で、同じ主のみあとを歩ませていただきたく思います。

最後になりましたが、愛宕町教会に連なる全ての皆様に、神の御恵みが豊かにあるようお祈り申し上げます。

#### (4)編集後記

▼本号は、「恵みにより召されたる者の集い」をテーマに宍戸俊介牧師に語っていただいた「2022年教会全体研修会」の特集号です。コロナ感染症が急激に蔓延したこともあって、参加者は25名と少なかったものの、「恵み」ということ、そして「教会が頭であるキリストの恵みの御言葉により形成され成長していくこと」をじっくり聞けた、充実した会となりました。参加できなかった方々も、是非講演内容全文をお読みいただけたら幸いです。

また感染症も厳しくなってきましたね。今年の愛宕町教会の祈りの課題「災禍の中にあっても、聖霊の助けを頂いて、礼拝を守り、御言葉を聞き、諸集会も行う、真っ直ぐ主に仕える教会でいられますように」を覚えて祈りましょう。そして、神様が私たちに願っておられるものを受け取ることができる教会として、養われ育てていただけますように祈ります。(K.S)